

## 大串弘美作 「許された息子」

<前編>

孫息子 ねえ、おじいちゃん。うちのクラスの健太がまた女の子をいじめたんだよ。何度いっても直らないって、先生が怒って、今日は廊下に立たせたんだ。けど、こっそり抜け出して健太のやつ、うちに逃げて帰っちゃったんだよ！

おじいちゃん ふーん。そりゃまた困った子だね。お父さんやお母さんも手を焼いてるかな？

孫息子 ねえ、そんな悪い子だと、神様はどうするのかな。もう謝っても神様は許してくれないの？

おじいちゃん いや、そんなことはないさ。神様はね、とっても優しい方なんだよ。それじゃ、こんな話をあげよう。この話は、おじいちゃんのお父さんから聞いた話なんだ。

(音楽) (ブリッジ)

おじいちゃん (ナレーション) 昔々の江戸時代、ある村に、すごいお金持ちの庄屋さんがいた。庄屋さんというのは、今で言うと村長さんだ。母親は早くに亡くなり、父親と2人の息子が、部屋が何十もあり、使用人が何人もいる大きなお屋敷に住んでいた。兄のほうは心の優しい子で、だれからも好かれていたが、弟は違っていた。母親がいなかったので、使用人たちからかわいそうに思われ、少し甘やかされて育ったせいか、とてもわがままだった。その上、負けず嫌いで、優しいところがなく、物心ついてから人前で一度も涙を見せたことがなかった。だが父親は2人の息子を分け隔てせず、同じように愛していた。ある日、父親は2人を呼び寄せてこう言った。

物語の父親 お前たちも大分狩りがうまくなったから、1つずつ猟銃をやろう。今度は自分の銃で狩りをしてみろ。どちらか大きな獲物を仕留めてきたほうには褒美をやるぞ。

ナレーション そこで兄は銃を持って猟に出た。兄は一日中、山の中を歩き回ったが、何一つ捕れず、がっかりして帰ってきた。弟は、父親からもらった銃を売って市場に行き、大きな獲物を買ってきた。その日の夜、父親が2人を呼び寄せて言った。

父親 さあ、今日お前たちが捕ってきた獲物を見せておくれ。

兄息子 すみません、おやじさん。今日は獲物を見つけることができず、何も捕れませんでした。

弟息子 おやじさん、おれは一日中、山の中を歩き回り、険しいがけをよじ登ったりして、やっとの思いでこの獲物を仕留めました。頂いた猟銃は、がけを降りる途中にうっかり谷底に落としてしまいました。

ナレーション 父親は約束どおり、大きな獲物を捕って帰ってきた弟に褒美をやった。弟の持ってきた獲物が自分で捕ったものではないKとを父親は知っていたが、何も言

わなかった。またしばらくして父親は、2人の息子呼び寄せてこう言った。

父親 さあ、今度は財産の増やし方を学んでみろ。やがてお前たちのものになる大事な財産をしっかりと管理しないといかんからな。お前たちに10両ずつ与える。これを元手に金もうけをするんだ。どちらか多く増やしたほうに褒美を与えよう。

兄息子 よし、僕は米をたくさん買って、おいしい握り飯を作り、貧しい人たちに安く売ってあげよう。そうすれば人々のためにもなるし、少しはお金も増えるだろう。

ナレーション 兄息子は、知り合いの農家から米を安く分けてもらい、一生懸命握り飯を作った。その握り飯はとてもおいしく安かったので、人々に大変喜ばれ、いくらかお金も増やすことができた。

兄息子 弟息子は、10両を貧しい人たちに貸し、倍にして取り立てをした。しばらくして、父親は2人の息子呼び寄せて、増やしたお金を見せるように言った。

兄息子 わたしは10両を13両に増やしました。

弟息子 おれは10両を倍の20両に増やしました。

ナレーション それで父親は約束どおり、多く増やした弟息子に褒美を与えた。父親は、彼が汚い方法でお金を増やしたのを知っていたが、何も言わなかった。やがて収穫の秋になった。毎年この季節になると、村の庄屋は小作人から取り立てた米をお代官様に、決められた分だけ納めなければならなかった。いつもは父親が納めていたが、その年は違っていた。父親は、2人の息子呼び寄せてこう言った。

父親 今年は年貢米を2人で納めてきなさい。そろそろわしも隠居のことを考えねばならんからな。今年は米俵10俵だから、一人5俵ずつ納めてくるのだ。

ナレーション そこで2人は、米俵を5俵ずつ荷車に積んで、お代官様のところまで運んでいった。納める人はそこのお役人の前で、ちゃんと分量どおりあるかどうか、量ってみなければならなかった。まず兄からだった。

役人 よし、次！ まず米俵5俵だな。量ってみよ。

兄息子 はい。

(効果音) (ザアとお米を量る音)

役人 よし、いいだろう。次、残りの5俵を量ってみよ。

弟息子 はい、ただいま。

弟息子モノローグ へへ、ちょっとぐらいごまかしたってバレっこねえや。少なめに量って、残りは高く売って遊ぶ金にしよう。

ナレーション と、その時。

役人 お前！ 何やってるんだ！ ちゃんと量れてないじゃないか。わしをだまそうとしたな。この不屈き者め。百たたきの刑にしてやる。

(効果音) (ムチの音と、弟息子の悲鳴。)

ナレーション 弟息子は、初めて受けた辱めへの怒りと背中での痛みで、頭のとっぺんから火

が吹き出しそうだった。

弟息子 あの小役人め。何でおれがこんな目に遭わなければいけないんだ。チキショー、頭にくる。元はと言えば、おやじがあんなことを言い出すからいけないんだ。よーし、あんな家、財産ふんだくって出てやる。もうウンザリだ！

ナレーション 荒々しく家に帰った弟は、自分のやったことは棚に上げて、父親に食ってかかった。

弟息子 おやじさん。おれはもうイヤだ。おやじさんがあんなところに行かせるから、こんなひどい目に遭ってしまった。見てくれよ、このアザ。

父親 息子よ。それは心得違いというものだぞ。お前が間違っことをしたから、当然の報いを受けたのだ。これまでも、わしはお前を何度か試してきた。覚えているか？ 猟銃を与えて狩りをさせた時、そして 10 両を与えて金の使い方を試した時。お前はその度に、兄さんを負かしてわしの要求にこたえた。それでわしは約束どおりの褒美をお前にやった。だがな、息子よ。わしの目は節穴ではないぞ。どの場合も、お前がズルをして、陰でウソをついたり、人を脅したり、苦しめたりしながら、できるだけ楽をして褒美をせしめようとしたのを、わしはちゃんと分かっておった。

弟息子 ウ、ウソだ。もしそうなら、そのときにちゃんと言ってくれればいいんだ。おやじさんはやっぱり兄貴のほうがかわいいんだ！

父親 それは違う。わしは 2 人とも同じように愛している。だからじっと忍耐をして、お前が自分で気づくの待っていたのだが、どうしても改めないで、体の痛みで目を覚まさせようとした。わしは本当につらかったのだよ。

弟 へん、都合のいいこと言うなよ。こうなると分かってて、おれをこんなひどい目に遭わせるなんて、やっぱりおやじさんはおれが憎いんだ。もうイヤだ。こんな家は出てく。さあおやじさん、今すぐ財産の半分をおれにくれよ。

ナレーション 弟は翌日、荷車何台かの財産を積んで、村を飛び出した。父親は、悲しそうな目をしていつまでも見送っていた。

#### <後編>

ナレーション それから弟息子は、百たたきで傷ついた背中をいやすため、温泉に行った。おいしいものを食べたり、お湯につかったりして、ゆっくりとぜいたくをして療養した。

弟息子 ああ、何か面白いことないかなあ。

ナレーション そう思っているところへ、見知らぬ男がやってきて、なれなれしく声をかけてきた。

男 へっへっへっ。だんな、面白いことなら、このあつしにお任せくださいませ。どこへでもご案内しますぜ。

弟息子 おお、そいつはありがたい。そうだな、まずは、こんな辺りな所はもう飽き飽きしたから、何かパーっと騒げるにぎやかなところへ連れてってくれよ。金ならいくらでもある。

男 へへへ、お安い御用で。

ナレーション 弟がついていくと、その町一番の盛り場に着いた。華やかさも町一番だが、値段が高いのも町一番。しかし、今の彼には、値段の高さなど問題ではない。何しろ村一番の金持ちである父親の財産の、半分ももらってきたのだから。

(効果音) (民謡、演歌などで騒ぐ人々。)

弟息子 おーい、もっと酒持ってこい！

ナレーション こうして彼は、毎日毎日、男と一緒に飲み歩いた。そして、そろそろそんな騒ぎにも飽きてきたころ…。

弟息子 なあ、もっとドキドキするような遊びはないかな。

男 もっとドキドキする遊びですかい。そうですね…。へっへっへっ、だんな、ありません、もっと楽しいことが。ささ、行きましょう。

ナレーション そう言うと男は、彼を連れて歩き出し、なにやら怪しげな小屋に入っていった。

弟息子 ン？ はは一ん、バクチか。

ナレーション 彼は、早速バクチに加わった。

博徒A さあ、張った張った張った！

博徒B 丁！

博徒C 半！

博徒D 半！

弟息子 丁！

博徒A よござんすね。二六の丁！

博徒たち (口々に)あーあ。ダメだ。チキショー。

ナレーション こうして彼は、来る日も来る日もバクチをやって楽しんだ。しかし、勝っているうちは楽しいが、負けてくるとだんだんイヤになってきた。

弟息子 おい、こころで何か大もうけの話はないか？

男 うーん、大もうけの話ですかい。そうっすねえ…。おっと、こんなのはどうです、だんな？ 残りの金を貧しい連中に貸して、倍にしてふんだくるってのは。

弟息子 高利貸しか。前に似たようなことやって、取り立てに苦労したけど、設けるためには仕方ないか。

ナレーション そこで2人は、貧しい人たちにお金を貸しては、汚い方法でたくさんのお金を取り立てた。

男 やい、この間貸した金を返してもらおうか。

貧乏人A(女) もうしばらく待ってください。

男 どうしても返せねえってんだったら、この米もらってくぜ。

貧乏人A あ、それは！ それを持っていかれたら、明日からどうやって食べていったらいいんです？

男 うるさい！

貧乏人A やめてください。(けられて悲鳴を上げる。)

弟息子 さあ、金を返してくんな。

貧乏人B(女) すみません。もう2、3日だけ待ってください。

弟息子 待てねえな。払えねえんなら、この着物持ってくぜ。

貧乏人B あ、それは！ 娘の嫁入り衣装です。それだけは…。

男 やかましい！ いやなら金を返せ！

ナレーション こうして、2人はどんどん金を増やしていった。そんな時、男がこんなことを言い出した。

男 へっへっへっ、だんな、もっと度デカくもうける方法があるんですがね。

弟息子 何、もっと度デカくもうける方法？ 何だ、それは？

男 へっへっへっ、ここじゃ細かいことまでは話せませんよ。こいつは裏の話なんですね。一步間違えばブタ箱行きですから。まあ、あつしに任せてくだされば、今の金を3倍にして差し上げますぜ。10日ほど下さいよ。

弟息子 ほ、本当か？ 3倍かあ。悪くねえ話だけど、本当に信用できるんだろうな。

男 大丈夫ですよ。決して悪いようにはしません。

ナレーション そう言って男は、弟の全財産を持って立ち去った。それから10日後、彼は約束の場所に慶び勇んで出かけた。男が大金を持って現れるのを、今か今かと待つうちに、約束の時間を3時間も過ぎてしまった。

弟息子 ひょっとして、あいつ、おれをだましたんじゃ…。

ナレーション それから彼は、更に3時間以上も待ったが、とうとう男は現れなかった。その火から彼は、食うにも困るようになってしまった。今までお金を貸した人や、飲み食いを振る舞った人々に何か食べ物をくれるように頼んでみたが…。

貧乏人A(男) ふざけるんじゃないねえ。

貧乏人B(女) だれがあんたなんかには食べ物など恵んでやるもんか。

貧乏人C(男) 金のねえお前なんかには用はねえよ！

ナレーション 彼が行く当てもなく、とぼとぼと田舎道を歩いていくと、豚飼いの小屋に出くわした。

(効果音) (豚の鳴き声)

弟息子 あ、豚か。それにしてもうまそうにエサを食ってるなあ。おれもあの豚のエサでいいから、腹いっぱい食いたい。

ナレーション その時だった。

農夫 おい、何やってるんだ。見世物じゃないぞ。とつとつうせろ。

ナレーション 豚飼いに汚いフンを浴びせられかけて、慌ててそこを逃げ出した。

弟息子 クソ！ 何て惨めなんだろう。あーあ、こんなことになるなら、おやじのところから出てなんかこなきやよかった。あそこにいれば、こんなことにはならなかったのに…。元はと言えば、おれが悪かったんだ。おれがわがままだった。小さい時から何不自由なく、何でも自分の思ったとおりに育てられてきたから、金さえあればなんでもできると思った。汗を流して働く喜びも、貧乏のつらさも、何一つ分からなかった。あんなにいい兄貴を見下し、おやじの心をあんなに傷つけてしまった…。ああおやじさん、おれはどうしたらいいんだ？ そうだ、おやじのところへ帰ろう。許してくれないかもしれない。いや、息子でなくてもいい。使用人として雇ってもらおう。おれの帰るところは、もうあそこしかない…。

ナレーション 彼はそうつぶやくと、父親の家に向かって歩き出した。3日3晩飲まず食わずで、やっとの思いで家の近くまでたどり着いた時だった。遠くからその姿を見つけた男が、転ぶようにして駆け寄ってきた。父だった。弟息子が出ていってから、毎日、彼の帰るのを待っていたのだ。父の髪の毛は真っ白になっていた。

父親 息子よ。よく帰ってきた。本当によく帰ってきてくれた。

ナレーション そう言って、父親は彼を抱き締め、抱えるようにして家に連れていった。そして温かいお風呂に入れ、おいしい料理をたくさん食べさせた。

弟息子 おやじさん、申し訳ありませんでした。財産を使い果たして帰ってきたおれに、こんなによくしてくださり、何て言っているのか…。おれは、使用人にでもしてもらおうと思って帰ってきたのに。

父親 何を言ってるんだ。お前はわたしの息子ではないか。お前が帰ってきてくれればそれでいいんだよ。

弟息子 (泣く)

ナレーション その時、弟息子の目から涙がこぼれ落ちた。それは、彼が初めて流した涙だった。

(音楽) (ブリッジ)

おじいちゃん …というわけで、神様は、どんな悪いことをした人でも、自分の悪かったことを悔い改めて、神様のもとに帰ってくるなら、この父親のように、いつでも温かく迎えてくださる方なんだよ。

孫息子 ふーん。神様って優しいんだね。

おじいちゃん ああ。その健太って子も、ひょっとして、心の中はとても寂しいのかもしれないよ。どうだい、真一。思い切って教会学校に誘ってごらん。お前もよく知ってる優しいイエス様の話を聞いたら、心が変わるかもしれないよ。あの弟息子のように根。おじいちゃん、健太君のためにもお祈りしてるから。

孫息子 うん！

(完)